

「四万十炎歌」



【自然爺】

四万十川は「最後の清流」というだけあって大勢のファンがいます。「他にもっと水質の良い川が

ある」と言う御仁もいますが、懐の深さでは右に出るライバルはいないでしょう。深い懐は、大勢の人たちの知恵と行動力と団結が、川や流域の自然を大切に育てているからだと思えます。

先日、「冬の四万十・体験ツアー」と銘打ったイベントが中流域の町で行われました。トラキチならぬシマキチさんたちが大勢集まって、冬の四万十を満喫していました。

僕は、このイベントで初めての仕事をしました。



僕の仕事は一度で終わりです。一生に一度だけですから一生懸命に頑張ります。僕を連れてきてくれたのは、四万十流域で間伐ボランティアをしている『四万十樵塾（きこりじゅく）』の人達です。

では僕の自己紹介をします。僕はどこで生れたのか自分では知りません。樵塾のYさんが仲間に紹介してくれてから、樵塾の活動には必ずお供します。僕の身長は五十センチくらいで胴の直径は三十センチくらい、頭から足元まで八つの切り込みがあるだけの単純で不細工な体形です。元は杉の間伐材でしたが、切り捨てるだけでなく有効利用しようと、樵塾の皆さんが僕を作ってくれます。

僕の仕事ですか？ 僕の一族を皆さんは『丸太火鉢』と言いますが、僕個人の名前はまだありません。そうです、僕は焚き木です。でも、ただの焚き木ではありません。僕が燃えると、暖かいだけでなく、頭にお鍋などを乗せて料理ができるのです。パワーもすごい

ですよ。家庭用のガスコンロに負けませんか。僕の身体が炎に変わって、皆さんを暖かくしたり、料理のお手伝いをするのが僕の仕事です。終わったら真っ白な灰だけになって、次の世代の肥料としてリサイクルされます。

このイベントの日に、僕が一生懸命に仕事をしているのと、周りに集まった人達の話し声
が聞こえてきました。

「これは初めて見た。驚いた。こういう形で
間伐材を有効利用するのは素晴らしい」

「本当にティッシュペーパーだけで着火できる。感動だ。火力が強くて、暖かい」

「こんなにキレイに燃えると、川原を汚さないからキャンプで使うのに最高だ」

「キャンプサイトに準備しておく、キャンパーたちが喜ぶだろう」

「燃やすまではイスで利用したら便利だ」

「これだけ火力が強いと、いろいろな料理に
挑戦できそうですね」

「これはキャンドルだ。キャンドルサービス



なんかの催しをすると楽しいだろう」
「名前を付けて売り出せないかなー」
「樵塾の火起こしとセットにすると、もっとおもしろくて楽しくなりそうだ」

僕は嬉しくて、力いっぱい炎を出して一生懸命に仕事をしました。ご飯も炊きました。ダッチオーブンでローストチキンも作りました。みんなが美味い、暖かいあたたかいと言つて喜んでくれたのが、何よりのご褒美でした。次の朝、灰だけになった僕を誰かが畑に撒いてくれたので、次の世代のための肥料になつて働きます。

僕は、自分の名前が『四十炎歌（しまんえんか）』になったら、ロマンチックでいいな
！と思つています。